

## 高まる要求水準

村越真氏が前号に執筆した特集記事の中に、以下の記述が見られた。

「近年増え始めた、オリエンテーリングで生活していく道を探る『プロフェッショナル』たちにとって、オリエンテーリングは生活そのものである。その高い要求水準を満たす場には、残念ながらオリエンテーリングは達していない。本格的な普及・発展を考える時、プロフェッショナルの力は欠かせない。プロフェッショナル精神の適切なバランスと融合はどこにあるのだろうか。」

私たちがオリエンテーリングの普及・発展の形を想像する時、それぞれ何らかのモデルを思い描く。ある者は北欧のオリエンテーリングの姿を。またある者は日本の人気スポーツの姿を。いずれにせよ、そこにプロフェッショナルの介在が不可欠であると気付くはずである。

ここで試しに、「日本からオリエンテーリングの世界チャンピオンを」という目標が達成された日の様子を想像してみよう。

## 異次元の存在

日本初のフットO世界チャンピオンとなる彼は、ヨーロッパに拠点を置き、国際大会を転戦している。日本国内の大会では、滅多にその走りを目にできない。彼・彼女の活躍は、専らマスコミの報道によって知ることになる。

また、彼が契約するコーチやトレーナー、マネージャーはオリエンテーリングの日本代表経験者や学生クラブ指導経験者ではない。北欧のスポーツ指導者養成機関でコーチングスキルを会得し、一線でオリエンテーリング選手の指導を重ねてきたプロコーチ、日本の様々なプロスポーツで選手のフィジカル向上に寄与してきたトレーナー、スポーツ選手マネジメント会社から派遣されたマネージャーといった顔ぶれだ。

彼は北欧の有力クラブ（年間1,000万円単位の予算を選手強化に投じるクラブもある）に籍を置きつつ、企業からのスポンサーでも数社に渡って得ている。ヨーロッパが主戦場となるので、スポンサーは日本企業とは限らない。いずれ、広告塔としての価値に目を付け、オリエンテーリングクラブを作って彼に実業団選手としての契約を持ち掛ける日本企業も現れるかもしれない。

そうなるから、彼は相変わらずヨーロッパを活動拠点にし続けるだろう。

このように、彼の競技環境は、過去の代表たちとは随分異なるに違いない。彼が代表となる以前の過程にも、現有の日本の組織・団体が関わりを持つとは想像できない。なにしろ、「世界を舞台に闘おう」という野望を持ち、実際に運動神経や体力的資質にも恵まれている少年少女にオリエンテーリングと親しむ機会を与え、その潜在能力を開花、発達させていくような発掘・育成の機能を持つ組織・団体は現状見られないのだから。

このような想像をしていると、正直少しつまらない気持ちになる。そのつまらなさの正体は、「プロが席卷する世界になれば、自分が出る幕はなくなる。これまでの充実した競技生活は送れなくなる」という恐れなのだろう。そして、恐れを抱いた末に「それなら、このままで良い。プロは流入して来ないでくれ」と考えてしまいたくもなる。

## 草の根から高みを望む

しかし、オリエンテーリング界は衰退傾向にあるのが現状だ。上記のような、消極的な考え方は捨てなければならない。「変化は歓迎する」「最終的に自分が出る幕はなくなるかもしれないが、変化の過程で陰の働きぐらいはできるはず」「プロの仕事に対しては傍観者となるにしても、オリエンテーリングはなくなるのだから、充実感是不変変わらない」と発想を転換する必要性に迫られている。

ロードレース大会に出場し、招待選手である「有名ランナー」の姿を見る機会がある。招待ランナーたちは、まさに上記の「オリエンテーリング世界チャンピオン氏」と似たような競技人生を送って来たであろう実質プロのアスリートだ。彼らが自分と同じクラブで練習し、同じ車で会場へ向かい、同じ物陰で着替えることはない。レース後と一緒にクーリングダウンをしたり、一緒にビールを飲みながらお互いの走りや評価し合ったりもしない。それでも、同じスポーツをして、同じ大会に出場した選手同士である。一面識すらなくても親近感が湧くし、応援したくなる気持ちも高まる。敬意も強まり、「もっと手が届かない場所で活躍して欲しい」とさえ感じる。

これはこれで、一つの面白いスポーツとの関わり方だ。現状、日本代表選

手の知人がおり、彼・彼女の競技レベルも生活環境も理解できるという関係者は多いと思われるが、これまでそうであったというだけで、これからもそうでなければならない、ということはない。冒頭で想像したチャンピオン氏は、知人ではないし、次元が異なる、理解不能な実力を持った競技者であろう。それでも、ロードレース大会の招待選手のように応援できるし、自分自身も変わらず競技生活を堪能できるような気がしないだろうか。

## やがて波は来る

ともかく、競技面にせよ運営面にせよ、オリエンテーリングのプロ化の波は世界的には確実に存在するし、日本にもさざ波ぐらいは及びつつある。しかし、村越氏が指摘するように、残念ながらプロフェッショナルたちの高い要求を満たす水準には、私たちの受け入れ態勢は達していない。受け入れを阻む精神的なブロックが外れないことには、その水準には永遠に達しないだろう。日本でのプロ化は、起こるとしたら外部からの津波のような力によって、意外なほど短期間の内になされるのではないかと。となると、私たちには波を受け入れる、より正確に言えば波に飲み込まれる心の準備が必要なのではないかと。

とはいえ、津波は滅多に起こらないものだ。読者の皆さんが、この記事を読んで「いつ来るか分からない波を待つ、恐れるのではなく、自分たちが日本のオリエンテーリング界を盛り上げてやる」と、感じてくれたようなら頼もしい。関係者一人ひとりが、これまでより少し広い視野を持ち、少し長い時間を注いで、少し深くオリエンテーリングについて考えて、できることをより真剣に行えば、ひょっとしたら私たち自身が何らかの波を起こせるかもしれない。

村越真氏は、前号で『『オリエンテーリングが変わる。日本のアウトドアスポーツが変わる』この壮大なビジョンは、もちろん、今の時点では筆者一人の思いである』と述べた。重い荷を一人で担いでいて、手に余った時には下ろすしかなくなる。思いを村越氏ただ一人に抱えさせてはならない。村越氏に独り占めさせてはならない。

(松澤俊行)